

令和4年度
宮崎県学校図書館教育研究大会

都北大会

『豊かな心と学びを育む学校図書館』



関之尾滝

目 次

- I 学校図書館のセンター機能を高めた魅力的な学校図書館を目指して
～学校・行政・地域の連携と協働による学校図書館運営の実際～
小林市立小林小学校 橋口 加代子
- II 魅力的な学校図書館づくり
～様々な「人」との連携を通して～
新富町立上新田中学校 寺原 もも
新富町立新田中学校 石川 利英
新富町立富田中学校 清 清香
- III 学習情報センターとしての学校図書館の活用
～ICTを利用した学習との併用を目指して～
都城市立南小学校 磯脇 由実
都城市立東小学校 大野 奈々
- IV ICT化の中の「学習・情報センター」としての学校図書館の在り方
～「紙」と「ICT」の両立を目指して～
都城市立妻ヶ丘中学校 江藤 佳孝
- V 学校図書館教育における指導の工夫と充実
～持続可能な学校図書館経営を目指して～
日南市立細田中学校 清田 しのぶ
- VI 学校における読書指導
～各校における読書指導の実践を通して～
国富町立森永小学校 川野 美輪
- VII 特別支援教育における読書活動
～特別支援教育の視点に立った読書指導～
宮崎市立木花小学校 石田 文子
- VIII DX時代の学校図書館構築
～高校図書館の現状とこれから～
宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校 黒木 豪
- IX 豊かな心と学びを育む学校図書館
～図書主任の役割、ITによる授業、支援法研究、教育～
五ヶ瀬町立五ヶ瀬中学校 伊東 巧磨
高千穂町立上野中学校 池田 恭平
- X 図書主任としての児童と本を繋ぐ取組
～児童の自主的・自発的な読書活動の充実を求めて～
延岡市立西小学校 甲斐 身江子
- XI 地域・家庭・公共図書館が協働して担う読書活動のあり方
～各地区の特色を生かした読書活動の実践を通して～
美郷町立西郷義務教育学校 川崎 愛
美郷町立南郷小学校 那須 裕美子
- XII 読みたい本を選び進んで読書する児童生徒を目指して
～地域・家庭・市立図書館との連携を通して～
日向市立平岩小中学校 松原 千春

I：第1分科会A「魅力的な学校図書館づくり」

学校図書館のセンター機能を高めた魅力的な学校図書館を目指して ～学校・行政・地域の連携と協働による学校図書館運営の実際～

小林市立小林小学校 教諭 橋口 加代子

1 はじめに

小林市は、宮崎県南西部に位置し、小学校12校、中学校9校がある。「小中一貫教育の推進」「コミュニティ・スクールの推進」「地域学校協働活動事業」など、様々な連携・協働による教育の推進が図られている。学校図書館教育においても、小林市立図書館が「小林市学校図書館支援センター」として機能しており、各小中学校には、地域住民や保護者等で構成された読み聞かせボランティアのグループが組織されている。

2 主題設定の理由

文部科学省のガイドラインにあるように、学校図書館は、「読書センター」、「学習センター」、そして「情報センター」としての重要な機能を有しており、学校に欠かすことのできない重要な施設といえる。しかし、近年の社会問題として、青少年の本離れが進んでいる実態がある。また、令和3年度の全国学力・学習状況調査において、家庭の蔵書数が多いほど、正答率が高くなるという結果が出ている。

そこで、学校・行政・地域の連携と協働により図書館のセンター機能を強化することは、児童・生徒が魅力を感じニーズに応える学校図書館運営に繋がり、児童・生徒の情操教育だけでなく、学力向上を図る上でも重要になると考え、本主題を設定した。

3 研究目標

「読書センター」、「学習センター」、「情報センター」の視点から、様々な連携・協働の実践等に取り組み、豊かな心と学びを育む学校図書館運営の在り方を究明する。

4 研究の仮説

各校の実情に応じて、「学校と行政」及び「学校と地域」の連携と協働等による図書館のセンター機能強化を図れば、児童・生徒の情操教育の推進や学習活動の充実に貢献し、豊かな心と学びを育む魅力的な学校図書館運営の実現が可能となるであろう。

5 研究の実際

(1) 「読書センター」としての学校図書館づくり

ア 学校組織での取組（職員間連携）

○ 縦割り班等のふれあい読書による児童間の読書啓発

下学年から図書館活用への意識を高める必要があると考え、縦割り清掃の班で上学年が事前に本を選んで、掃除の時間を活用した下学年への読み聞かせを実施している。

○ 職員による全校児童への読書啓発

全校児童に向けての読書月間の取組としてZ o o m（感染症対策）を使い、読書への興味・関心を高めるために、職員によるおすすめの新刊本の紹介や読み聞かせ、アニメーションを実施した。

イ 地域人材（図書館ボランティア・読み聞かせボランティア等）との連携

○ 地域ボランティアによる読み聞かせ

○ P T A図書サポート委員会の保護者や図書館協力員による環境整備支援

ウ 児童による図書委員会活動等の工夫

○ 図書委員会によるイベントの実施

（読書量ランキング掲示、スタンプラリー・読書ビンゴ・読書クイズ 等）

○ 図書委員会による下学年への読み聞かせ

○ 図書委員会による「おすすめの本の紹介」コーナーの作成

エ その他

○ 小中連携による読書啓発として卒業生による読み聞かせの実施

○ S S C文庫（市立図書館からの定期配本）や学級文庫の設置による「身近な場所で本を手にしやすい環境」づくりの推進

- 家族読書の推進
家庭読書の日の設定、図書館便りの発行
- (2) 「学習センター」としての学校図書館づくり
 - ア 小林市学校図書館支援センタースタッフ（図書館協力員等）との連携
 - 図書館協力員との連携による購入図書を選書
効果的な図書購入となるよう、教師からのニーズを把握し、昨年度に授業で必要とされた図書資料や、学校図書館で不足している図書資料を確認した。
 - 図書館オリエンテーションの実施
図書館支援センターへスタッフの派遣を依頼し、図書館の利用について、学年に応じたオリエンテーションを実施した。
 - イ 学習活動支援のための環境整備
 - 日本十進分類法（NDC）に沿った蔵書整備
生涯学習の視点から、児童が必要な本を考えて選ぶ力が伸びるよう、日本十進分類法（NDC）に合わせた蔵書の配置を整備している。
- (3) 「情報センター」としての学校図書館づくり
 - ア 市内一斉のタブレットPC導入に伴うICT活用の視点に立った取組
 - School e-Library（電子書籍）の導入【年間契約】
一人一台タブレットPC導入に合わせて、一人1アカウントの年間契約による、常時2000冊利用可能な電子書籍での読書活動を実施している。

6 成果と課題

(1) 成果

- 図書室の使い方の学習を図書館支援センタースタッフと連携して行うことで、図書館利用についての専門的な部分も含め、わかりやすく指導できている。
- 電子書籍で様々な本に触れることができている。出版社8社2000冊の本が自由に読めることから自分に合った本を選ぶことができている。
- 読書指導については、読み聞かせボランティアの方々の取組や委員会児童の取組により、児童の読書への意欲や関心が高まっている。
- 読書指導、学習活動支援ともに、PTA図書サポート委員会の活動や図書館協力員の各小中学校への配置により、学校図書館教育担当職員の業務の一部を担っていたため、負担の軽減となり、働き方改革にも繋がっている。

(2) 課題

- 新型コロナウイルス感染症対策や一人1台のタブレットPCの導入により、学校図書館の本を利用した調べ学習や読書の機会が減少傾向にある。読書の楽しさや大切さを伝える実践を取り入れていきたい。
- 魅力的な学校図書館づくりを目指すために、限られた資源（図書館協力員、委員会児童、地域人材及び蔵書）をどのように有効に活用していくか、さらに研究を進めていく必要がある。
- 学校図書館の利用と電子書籍の活用を両立した読書活動を推進していくことが必要である。学校図書館と電子書籍での読書冊数は前年度比で増えているが、図書予算内より契約しているため、毎年の更新の有無を検討する必要がある。

7 おわりに

魅力的な学校図書館づくりにおいて、現状では学校組織だけの対応は、担当教諭の負担が大きく推進が困難である。どうしても予算的な問題があるのだが、効果的なシステムの導入や人的な連携と協働体制による取組を今後も実践していく必要がある。

Ⅱ：第1分科会A「魅力的な学校図書館づくり」

～様々な「人」との連携を通して～

新富町立上新田中学校 寺原 もも
新富町立新田中学校 石川 利英
新富町立富田中学校 清 清香

1. はじめに

新富町は、宮崎県の中央に位置する人口約16,000人（児童生徒数約1,400人）の町であり、小学校3校、中学校3校（うち4校は小中一貫校）が設置されている。農業が盛んな町で、太平洋に面した豊かな海岸線は、その美しさからアカウミガメの産卵地にもなっている。また、「読書推進による人づくり・町づくり」を進めている新富町には、2016年にオープンした「きらり」という総合交流センターがあり、その中の町立図書館には、靴を脱いでゆっくり本を楽しめる部屋があったり、カフェを利用しながら勉強したりできるので、幅広い世代に利用されている。町内の小中学校でも、毎月23日を「ファミリー読書の日」と位置づけるなどして、様々な読書活動を推進している。

2. 主題設定の理由

公共図書館は基本的に、本に関心があり、本を求める人が自ら利用するところだが、教育現場にある学校図書館は、本が苦手な子どもをも引き寄せ、子どもたちの本への興味関心を高め、本を人生の友とする生涯学習者を育てるところである。そこで、「学校図書館に親しむ」「学校図書館に来る」ことが、「本に親しむ」ことの可能性を生むと考えた。

3. 研究目標

生徒は、魅力ある図書館を創っている「人」がいてこそ来館して本に関心を向けるようになるという考えのもと、様々な「人」との連携を図りながら読書環境の整備や読書活動を推進することで、学校図書館の利用者を増やし、本や読書への興味関心を高める。

4. 研究の仮説

校内の教職員や図書係、町の読書サポーターや読書推進委員会等と連携しながら、魅力的な図書館づくりに向けて様々な取組を行えば、学校図書館に来館する生徒が増え、本や読書に興味をもつ生徒も増えるのではないかと。

5. 研究の実際

(1) 教職員と連携した読書推進活動

- ① 生徒の動線を意識した掲示の工夫
ア. 生徒が毎日通る場所にブックライティングの掲示
イ. 図書館に向かう廊下（事務室前）の掲示物の工夫
- ② 教職員のおすすめの本の紹介
ア. 図書館に向かう廊下への掲示
イ. 廊下のモニター画面への表示
ウ. お昼の放送での紹介
（読書アドベントカレンダーとして図書館に展示）
- ③ しおり作りワークショップ・手作りしおりコンテスト
- ④ 楽器演奏とコラボレーションしたお話し



しおり作りワークショップ



楽器演奏とコラボしたお話し

(2) 図書係と連携した読書推進活動

- ① マスコットキャラクター作成
- ② 本の紹介
- ③ 学級対抗読書量貸出競争
- ④ 読書ビンゴ
- ⑤ 生徒による読み聞かせ（ハロウィンお話会）



図書係によるお話会

(3) 新富町読書推進委員会と連携した読書推進活動

- ① 手作りポップコンクール
- ② 多読賞（ベストリーダー）の表彰と紹介



ポップコンクール

(4) 読書サポーターと連携した読書推進活動

- ① 各校の図書主任と読書サポーターとの情報交換会
- ② 掲示物や展示（配架）の工夫
 - ア. 明るい空間づくり
 - イ. 季節感溢れる掲示物
 - ウ. 行事等に関連した本の展示
 - エ. 手に取りやすい配架の紹介
- ③ 廃棄の工夫
 - ア. 古本リサイクル市
 - イ. 町内の学校間での寄贈



古本リサイクル市

6. 成果と課題

(1) 成果

- 図書主任や読書サポーターだけが学校図書館に関わるという、これまでの固定観念を払拭し、様々な「人」と連携した読書推進活動を行ってきたことで、学校図書館に来館する生徒や先生方が増えた。
- コロナ禍において「人」との関わりが減っているなか、本や読書を通して「人」と関われる学校図書館が安らぎの場所、居場所となっているという生徒も多い。

(2) 課題

- イベント参加を目的に来館する不読傾向の生徒が、本を手にとって読む、本を借りるためにはどうしたらよいかを模索し、個に応じた積極的な働きかけを行っていかなくてはならない。
- 「学校図書館はこうあってほしい」という生徒の願いに応えるために、学校図書館の運営に生徒にも主体的に参画できるようにしていくことが、生徒の願いにより応えられる図書館となっていくのではないかな。

7. おわりに

いくら立派な図書館があり、たくさん本があっても、そこに「人」が居なければ図書館は書庫に過ぎないが、「人」がいることによって図書館は生きて機能を発揮する。生徒は「人」がいるからこそ学校図書館に足を運ぼうとするし、先生方も相談できる「人」がいて、授業に使えるように準備されているからこそ図書館を学習に活用しようとする。今後も図書主任として、さまざまな「人」と連携しながら読書推進活動を行うことで、さらに魅力的な図書館づくりをしていきたい。

Ⅲ：第2分科会B「学習情報センターとしての学校図書館の活用」

～ICTを利用した学習との併用を目指して～

都城市立南小学校 教諭 磯脇 由実
都城市立東小学校 教諭 大野 奈々

1 はじめに

令和3年度は、都城市や三股町で、1人1台端末が導入された最初の年になる。都城市三股町合同教育研究会図書部会（以下合同図書部会）では、年度当初、これからの調べ学習は1人1台端末が中心となり、学校図書館の情報センターとしての意義が薄れていくのではないかと危惧する意見が出された。しかし、平成19年度東京大学入学式総長祝辞の「インターネットで入手した構造化されていない大量の情報は『思いつき』を生み出すかも知れませんが、『閃き』を生み出すことはきわめて稀だと、私は確信します。」という言葉にもあるように、学校図書館には構造化された信頼性の高い情報が蓄積されている。合同図書部会では、よりよい情報センターとしての在り方について話し合いを行ったり実践報告作成を通したりして、効果的な支援はどうあるべきか考えた。

2 主題設定の理由

ICTを利用した調べ学習が主流を占めていく中で、児童・生徒及び教員が積極的に学校図書館を「学習情報センター」として活用できるように、ICTのメリット・デメリット、学校図書館のメリット・デメリットを比較する。そうすることによって「学習情報センター」としての図書館のよりよい活用方法が見えてくるのではないかと考えた。

各小学校で学校図書館とICTを併用した授業を実践していく中で、新たな成果と課題が見えてきたことにより、さらに充実した調べ学習を行っていくために、1人1台端末と併用していく方法を探った。

3 研究目標

(1) 学校図書館とICTを併用した授業の在り方

ア 図書館サポーターと連携を図りながら授業の目的に合った図書選定を行い、充実した調べ学習が行えるようにする。

イ 学校図書館と共にICTを効果的に活用することで、最新、かつより多くの情報を収集しながら調べ学習の質を高める。

(2) 活用しやすい情報センターとして環境整備の在り方

ア 学習者が活用しやすいように学校図書館の環境整備の工夫を行う。

イ 授業実践後の児童の成果物を蓄積し、活用の仕方を工夫する。

4 研究の仮説

1人1台端末を併用した授業を実践したり、図書館サポーターを活用し、図書室の環境を整備したりすることによって、「学習情報センター」としてより充実した図書館運営ができるのではないだろうか。

5 研究の実際

(1) 実態調査

- ① 上長飯小学校 第5学年 総合的な学習「われわれの田んぼから発信しよう」
国語「グラフや表を用いて書こう」の授業において行われた調べる活動で、何を使って調べ学習を行ったか実態を調査した。
- ② 総合的な学習と国語での実践後に、1人1台端末と図書館資料を利用した調べ学習についてのアンケート調査を児童に行った。

(2) 授業実践

- ① 図書資料と1人1台端末を併用した授業実践
 - ・ 石山小学校 第1学年 国語科「じどう車ずかんをつくろう」
 - ・ 長田小学校 第3学年 総合的な学習「動物調べ」
- ② 調べ学習に必要な本の選書を工夫し事前に準備した授業実践
実態調査においてわかった図書を使った調べ学習の課題を補うため、次のような実践が挙げられた。
 - ア 図書館サポーターに調べ学習の目的に合った、本の選書の支援（学習者の目的に合った資料の収集）をしてもらう。
 - ・ 明和小学校 国語 第1学年「じどう車ずかんをつくろう」
 - イ 公立図書館からの団体貸出を利用し、学校図書館だけでは足りない資料を集めておく。
 - ・ 西岳小学校 国語 第4学年「伝統工芸のよさを伝えよう」

(3) 環境整備

① 分類

ア 陳列の工夫

各学校、学年の棚を設置したり、調べ学習コーナーを設置したりするなど、調べ学習の際、児童が自分の手で本を探しやすくする工夫がなされている。

イ 環境整備

菓子野小学校では、こども新聞コーナーを設置したり、ピックアップした時事ニュースを模造紙に掲示するなどして、社会への関心が高まるようにしたり、図書室で寄贈されたDVDを視聴できるコーナーを設置したりしている。

② 日本十進分類法の掲示の工夫や成果物等の蓄積・活用

ア 日本十進分類法の掲示の工夫

各学校、日本十進分類法の分類に基づいた配架を、児童の目の届きやすい場所に一覧表を掲示して、目的を持って調べる際の参考にしている。

イ 読書イベントの活用

明道小学校では、日本十進分類法を理解し、図書室のどの場所にどのような内容の本があるか分かるようになることを目的としたイベントを行うことで、児童が調べ学習の本を手取るようになるなど、図書室を学習情報センターとしてより認識できた。

6 成果と課題

(1) 成果

- 図書館サポーターと連携することで、児童・生徒及び教員が本の選書に悩むことなく、調べ学習に図書を活用することができた。
- 公立図書館を利用することで、学校図書館の資料不足を補い、学習に役立つ最新情報を入手できた。

- 1人1台端末を併用することで、動画や写真からイメージを膨らませることができ、より充実した調べ学習をすることができた。

(2) 課題

- どの学校も授業の進度には大差ないため、公立図書館から授業の目的に合った本を収集するとなると、他の学校と時期が重なってしまう。今後は、市立図書館や県立図書館、町立図書館等うまく活用しながら、計画的に利用することが課題である。
- 高学年の時点において、自分の力で学校図書館を情報センターとして活用できるように、6年間を見通して指導していくと、目的をもって調べる力がさらに身に付いていくと考えられる。

7 おわりに

今回の研究では、図書館サポーターの配置による情報センターとしての機能向上を改めて実感することができた。また、1人1台端末と併用させることで、焦点化された図書館資料の情報や視覚的な見易さ、分かり易さなど、紙媒体ならではのよさを児童に体感させることができた。

今後は、図書館サポーターとの連携を図りながら、小学校の特質である幅広い発達段階に応じたICTと図書館との活用を関連づけた系統表を作成し、共通理解を図ることで、より情報センターとしての機能を高めることができると考える。ICTと図書館、双方のよさを十分に理解し、うまく学習に生かす力を身に付けさせることで、中学校を見据えた基礎作りを目指したい。

Ⅳ：第2分科会B「学習・情報センターとしての学校図書館の活用」

ICT化の中の「学習・情報センター」としての学校図書館の在り方 ～「紙」と「ICT」の両立を目指して～

都城市立妻ヶ丘中学校 教諭 江藤佳孝

1 はじめに

本地区の学校数は、市立・町立中学校 19 校、県立中学校 1 校の計 20 校である。学校図書館の現状に目を向けると、生徒数の減少と共に、図書にかける予算も減少傾向にあり、購入できる本も限られてきている。また、図書館サポーターが配置されているのは 20 校中 5 校のみで、学校図書館に関わる仕事は、図書主任と図書委員が担うことが多い。学校図書館を巡る環境は改善半ばである。

2 主題設定の理由

ICT化の波は学校での学びにも大きな影響を与えている。2019 年 12 月に文部科学省が打ち出した「GIGAスクール構想」の下、コロナ禍の影響も相まって、教育現場での一人一台端末が実現した。そのような中、生徒達には情報を精査・活用し、生き抜く力を身につけることが求められている。学校に設置義務が課されている「学校図書館」について、「学校図書館法第四条の一」に「図書館資料を収集し、児童又は生徒及び教員の利用に供する。」と規定されており、学校図書館は、自らの学びを磨き知識を広げる学習・情報センターとして学校教育の中心的役割を担わなければならない、ということは周知の事実である。これらの現状を鑑みるに、「学習・情報センターとしての学校図書館の在り方」について検討することは、喫緊の課題である。

本地区において「学習・情報センター」としての学校図書館活用の実態のアンケートをとったところ、「積極的に学校図書館を学習に活用はできていない。」という結果が得られた。一人一台端末が実現した今、本地区では情報収集の際、教室でのインターネット活用に偏りがちであることが明らかになった。理由として、学校図書館は「蔵書数が少なく、全員に行き渡らない。」「目的に合った資料がない。」「データが古い。」といった点が挙げられた。一方、インターネット活用においては、「根拠が不確かである。」「悪意ある情報も氾濫している。」という問題点も挙がってきた。

そこで本地区では、「ICT化の中の『学習・情報センター』としての学校図書館の在り方～『紙』と『ICT』の両立を目指して～」を主題として設定し、紙ベースの情報収集・活用とICTを利用した情報収集・活用の両立という点について各校の取組を共有するという手段で研究を進めることとした。そのうえで、今後の本地区の学校の学習・情報センターとしての学校図書館づくりに活かしていきたいと考える。

3 研究目標

学校図書館での紙ベースの情報収集・活用とICTを利用した情報収集・活用の両立

4 研究の仮説

各校の取組を共有することを進めていけば、学校図書館での紙ベースの情報収集・活用とICTを利用した情報収集・活用の両立が図れるのではないかと。

5 研究の実際

共有した各校の取組は以下のとおりである。

(1) 国語科における作品紹介の授業（実践①）

ア 授業内容

発展学習の一環として、学校図書館にある図書の中から、「論語」「俳句」「和歌」「詩」を読んで、心に響いた作品を選び紹介文を書く。紙上発表を行う。論語や和歌、俳句の資料が少なかったため、不足分をインターネット検索による情報収集で補うようにした。

イ 成果

文種の幅を広げたことで必要な書籍数を確保することができた。また古典や詩を材料としたことで資料の古さなどを考慮する必要がなかった。

(2) 総合的な学習における修学旅行の調べ学習（実践②）

ア 授業内容

修学旅行についての調べ学習の一環で紙ベースの資料とインターネット検索による資料の両方を使って取り組んだ。紙ベースの資料を全員分用意できないため、インターネット検索を行った後でテーマごとに図書館に集まる時間を設け、内容の真偽を確かめる作業を行った。必要となる新しい資料を予め図書館に購入しておいた。

イ 成果

年度初めに必要な調べ学習の内容を募り、購入図書で揃えることで、新しいデータの情報収集・活用ができた。また、インターネット検索による情報収集・活用は、やや難しいものがあり、生徒たちは、紙ベースの資料を使ったほうが容易にまとめることができていた。

(3) 総合的な学習における障害者福祉、パラリンピックについての調べ学習（実践③）

ア 授業内容

学校図書館の資料を基本とした調べ学習だが、資料の不足を補うために限られた資料をその場でパソコンのカメラ機能を使ってデータ保存をして利用した。

イ 成果

紙ベースの資料を基本とし、それを補う形でインターネット検索を行うことで、多くの人が活用しやすくする工夫ができた。出典元の記録にも使用することができた。それによって古いデータと新しいデータの比較も可能になった。

(4) 英語科におけるパンフレット作りの授業（実践④）

ア 「外国人に向けて日本の魅力・文化をパンフレットを作って紹介しよう」という授業。学校図書館の紙ベースの資料に加えて、図書館サポーターと連携をとって市立図書館の本の利用も促し、またインターネット検索も行う形で調べ学習を行った。

イ 日本語の表現から英語にする際に、分かりやすい文章や絵が載った図書館の本を利用することで、「手にとって実際に絵を見たり読んだりできるから分かる」と好評であった。それをきっかけに、「間違ってもいいから英訳に挑戦しよう」という楽しみにつながった。図書館サポーターとの連携により、資料探しがやりやすくなると共に、市立図書館との連携もスムーズとなり、生徒たちの学校図書館に対する関心も高まった。

(5) 社会科における調べ学習（実践⑤）

ア 授業内容

SDGsについて調べたことをまとめ、発表する学習。図書館資料を充実させるために、図書館サポーターを通じて市立図書館と連携し、17の各項目の必要資料を選出してもらい資料をPDF化した上で提供してもらった。（許可は取得済み）

イ 成果

クロームのクラスルームを活用して資料を生徒に配付したので生徒数分の冊数をそろえる必要がなかった。書籍の選出や提供を司書にお願いできたことで、より専門的な視点を取り入れることができた。インターネット検索だけでなく信頼性の高い書籍を利用したことで多方面からの情報収集を行うことができた。

6 成果と課題

(1) 成果

- まとめる際や思考する際に、紙ベースの資料の方が、生徒にとっては分かりやすいということが確認できた。また信頼性が高いという観点からも、同じような資料があった場合は、紙ベースの資料から情報収集・活用をすることが分かった。
- 学校図書館の紙ベースの資料を使った情報収集・活用は、全員分揃えられない、資料が古い、などの課題があったが、紙ベースの資料をPDF化して利用したり、カメラ機能を使って保存して利用したりするなどの工夫を行うことによって、ある程度は

補うことができることが分かった。

- 年度当初に調べ学習計画を調査することで、新しいデータの学校図書館の本を購入できた。

(2) 課題

- 図書館サポーターを利用した学習は、とても充実した学習にすることができるが、全ての学校で利用できるわけではない現状がある。
- 予算面から調べ学習用の図書の実充は困難であるため、公立図書館の利用をすることもできるが、教師側に公立図書館と連携するための時間的な余裕がないのでなかなか利用が進まない。

7 おわりに

今後、学校のICT化の勢いは増しこそすれ止まることはない。「学習・情報センター」として学校図書館での紙ベースの資料による情報収集・活用がどれだけなされていくか、それは、紙ベースの資料を実際に手にとって使ってみることが第一歩である。授業実践に示されたさまざまな工夫を本地区で共有しながら、また、図書館サポーターの実充など行政からの助けもいただきながら、紙ベースの資料とICTを活用した資料それぞれの利点を活かし、情報収集・活用の両立を図り、「学習・情報センター」としての学校図書館づくりを進めていきたい。

V：第3分科会「学校における読書指導」

学校図書館教育における指導の工夫と充実

～持続可能な学校図書館経営を目指して～

日南市立細田中学校 教諭 清田 しのぶ

1 はじめに

本校は、日南市の小規模校である。学校図書館教育における環境として、日南市には4つの公立図書館があり、学校図書館司書4名が21校（小学校12校、中学校6校、小中学校3校）を巡回している。本校の学校図書館は、蔵書更新率32%（日南市立小中学校で最下位・令和元年日南市調べ）である。

2 主題設定の理由

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」をうたい、その中に「学校図書館の計画的な利用」「読書活動の充実」を掲げている。中学校国語科では、改訂の内容として(5)「読書指導の改善・充実」が明記されている。また、「知識及び技能」に「読書」を位置づけるとともに、「読むこと」の領域では「学校図書館を利用した言語活動例」が示されている。今、求められている学校図書館の役割と機能を充実させ、生徒の読書活動のさらなる推進を図るためには、担当者の負担軽減に配慮しながら持続可能な学校図書館経営の工夫が不可欠と考え、本主題を設定した。

3 研究目標

学校図書館の効率的・効果的な運営を目指し、関係機関との連携・協力体制のよりよい在り方を追求し、「担当者の負担軽減」と「読書指導の工夫・充実」の両立を図る。

4 研究の仮説

関係機関との連携・協力体制のよりよい在り方をさぐりながら、学校図書館を利用した授業の工夫と学習環境の整備・改善を行えば、持続可能な学校図書館経営につながるであろう。

5 研究の実際

(1) 学校図書館を利用した授業等

ア 国語科の授業における活用

各学年で設定されている書籍やインターネットの情報を整理して表現する単元では、学校図書館司書にさまざまな書籍やパンフレット等の資料を準備していただいた。新学習指導要領に示されている「情報の扱い方」の学習も兼ねて行った。

イ 国語科以外の教科等での活用

「特別活動」「総合的な学習の時間」等でも学校図書館蔵書を利用している。学校図書館司書による朝読書の時間の読み聞かせやブックトークが、職業・進路や生徒会活動関連になることもあり、良質なメディアがよく融合していると感じられる。

(2) 学習環境の工夫・改善

ア 学校図書館の移転

「近くて、開放的で、使いたい資料がすぐに探せる・運べる・戻せる」学校図書館づくりを目指した。学校図書館司書との連携により、新書の納品や配架など、担当者の負担も軽減している。

(ア) 施設移転…校舎2階から、全校生徒教室に隣接する1階教具室に移転する。

(イ) オープンドア…施錠せず、常に入口の扉や窓が開いている状態にする。

(ウ) 蔵書の精選…移転を好機とし、生徒の実態に応じた利用価値の高いものを優先して配架する。利用価値が著しく低いものは、状態によって移管または除籍。

イ サステイナブルかつ効果的な学級文庫

市立図書館の巡回図書100冊を学級文庫として各学年教室に配架している。朝の読書の時間やビブリオバトルでもそこから選書している生徒が多く、読書の質の向上が図られた。本校の蔵書更新率の低さも補えている。

(3) 関係機関との連携・協力体制

学校図書館教育を学校の担当者だけで推進することが困難なことは、本県教育界の長年の課題であり、周知の事実である。担当者にも授業や学級経営、分掌等の業務があり、自治体の環境や担当者によって学校の取組と生徒の利益が偏っている現状が問題なのである。そこで、持続可能な学校図書館経営を実現するため、関係機関との間で互いにメリットの大きなものを中心に連携していくことを試みている。

ア 公立図書館との連携・協力体制

宮崎県立図書館によると、日南市立図書館の蔵書は充実しているという。蔵書更新率が低い本校は、市立図書館の力を借りずして学校図書館教育を充実できない。巡回図書、レファレンスに加え、昨年度からは依頼した書籍を運搬して届けるサービスが可能になった。このような連携により、学校としては蔵書更新率の低さを補え、他方、公立図書館にとっては貸出冊数の増加と魅力アップにつながっている。

イ 学校図書館司書との連携・協力体制

(1)(2)は、学校図書館司書との協働があってこそその取組である。本校図書館司書は専門性が高く、各校担当者のみならず他職員とも積極的に意思疎通と情報共有を図りながら活動してもらっており、担当者の負担軽減につながっている。

6 成果と課題

(1) 成果

- 生徒や職員の読書心をくすぐり、知的好奇心を刺激する学校図書館司書のさまざまな仕掛けが、今回の図書室移転を機にさらに享受しやすくなった。これにより、生徒と校内蔵書（市立図書館蔵書も含む）の距離が大幅に縮まった。
- 本校貸出数を過年度と比較してみると、感染症等の影響による臨時休業や利用制限があったにも関わらず大きな減少は見られなかった。それどころか、第2、3学年においては、一部が貸出数を増加させているという結果が見られた。

(2) 課題

- 今回の研究で取り組んだ内容は、これまでも各学校で工夫しながら取り組まれているものも少なくないと思う。過去に諸先輩方がいろいろな実践を重ねてられていることを考えると、それらの取組がデータ化され、いつでもオンラインで共有できれば、さらに学校図書館の機能も充実したものとなるのではないか。そのような共有システムの構築に期待するとともに、微力ながら私自身も何らかの役割を担えればと考えている。

7 おわりに

どこの地区のどの学校でも、さらには誰であっても無理なく学校図書館を利用した実践が可能でなくてはならない。学校図書館司書等の配置や公立図書館のサポート機能にばらつきがあっても、加配等で潤沢な教員数が確保されていなくても、生徒の当然の利益である「学校図書館を利用した学習」が保証されるという教育環境をつくりたい。

VI：第3分科会C「学校における読書指導」

～各校における読書指導の実践を通して～

国富町立森永小学校 教諭 川野 美輪

1 はじめに

本地区は、宮崎県の中心部からほど近く、緑豊かで自然に恵まれた環境にある。本地区には2町9校（小学校5校、中学校4校）があり、図書主任会のおりに、各校の取組や実践について情報交換しながら、図書館教育を進めている。児童数100人前後の小規模校も数校あり、半数の学校では司書教諭や図書事務の配置がない中（R3度）図書主任を中心に図書館運営と読書指導の充実を図っている状況である。

2 主題設定の理由

児童の読書活動を充実していくため、研究主題「豊かな心と学びを育む学校図書館」のもと、現在取り組んでいる実践内容を深めたり、新しい実践をつけ加え広げたりしていくことで、よりよい図書館経営を目指す。

3 研究目標

○ 豊かな心と学びを育む学校図書館

～各校における読書指導の実践及び情報交換を通して～

4 研究の仮説

各学校において、「豊かな心と学びを育む学校図書館」を目指した実践活動を行い、さらにそれらの情報を交換して実践内容を深めたり、広げたりすれば、児童の読書活動が充実し、よりよい図書館経営を行うことができるだろう。

5 研究の実際

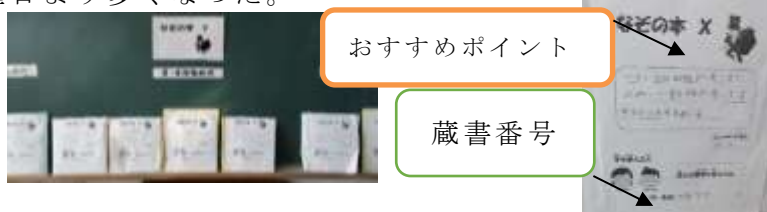
(1) 集会活動の実施

ア 読書集会

多くの学校で、図書委員を中心とした読書集会を実施した。読書クイズや委員会おすすめの本の紹介等スライドを活用しながら発表し、読書への関心を高める会となった。特に八代小では、「なぞの本X」として、おすすめの本を封筒の中に入れて紹介した。児童は、袋に書かれたおすすめポイントを手掛かりに本を借りるので、本を借りてから袋を開けるのを楽しみにしていた。金曜日だけの取組にしたので、金曜日の貸し出しが他の曜日より多くなった。



【読書集会（森永小）】



【なぞの本X（八代小）】

イ 図書館まつり

綾小学校・綾中学校・綾町立図書館では、同時期に「図書館祭り」を行い、中学生が作成した案内ポスターを小学校に貼る等、その期間は小学校・中学校・町立図書館が一体となって読書の推進を図った。

○読書ビンゴ～読んでほしい本のビンゴカードを作り、揃うと景品を渡した。

○読書の木～自分が読んでよかった本を紙に書き、読書の木に貼って掲示した。

○本紹介～図書委員会の児童がみんなに勧めたい本の表紙をコピーし、コメントを書いて図書室横掲示板に掲示した。

○カード絵合わせ大会～「綾中が選ぶ 80 冊」の表紙をカード化し絵合わせを行った



【カード絵合わせ大会】



【景品贈呈】



【宝（本）探し大会】

(2) 読み聞かせの実施

ア 地域ボランティアによる読み語り

綾中では、ボランティアの方々がテーマを設定して選書を行い、年間9回の読み語りを実施している。落ち着いた心で一日がスタートできると共に、生徒の図書選択の幅も広がった。

選書のテーマ：「友情」「心と体」「民話」「平和の願い」「戦争」「自然」「震災」等

イ 児童間で行う読み聞かせ

森永小では、図書館へ足を運ぶきっかけづくりと普段自分では選ばないような本との出会いをねらい、児童間（委員会児童や6年生から低学年へ）での読み聞かせを行った。

(3) 読書推進期間の設定

ア 読書の日

国富町では、全小・中学校で毎月15日を、綾小学校では、毎月第2水曜日を読書の日として、家庭での読書を推進してきた。各学校では、この「読書の日」に合わせて、親子読書週間を設定したりノーメディアデーを実施したり、様々な企画を工夫しながら実践した。特に木脇小では、15日を含む1週間を「読書週間」とし、感想文コンクールを行い、選ばれた感想文は、校内放送で紹介し本や友達の考えに関心をもつことができるようにした。

6 成果と課題

(1) 成果

- 各学校での取組を伝え合うことで、自校での取組の参考にすることができた。
- 町で「読書の日」や「読書祭り」が設定されているので、それに合わせた実践を各学校で工夫して行うことができた。

(2) 課題

- 各学校で同じような問題点が提示されたが、それらを解決するための共通実践にまでは至っていない。
- 町の取組（読書の日等）に合わせて、取り組む内容について共通化を図ることで、より効率的で効果的な実践を行うことができる。

7 おわりに

今回の研究を通して、各学校の実践事項について情報交換し、その内容を共有することができた。また各学校での問題点も分かり、それらには共通する事項も多かった。コロナ禍でなかなか主任会等を行うことはできない状況が考えられるが、今後はさらに町全体を通しての取組や課題解決のための手立て等、実践内容を共有化することが大切であるとする。より効果的・効率的に読書指導を行うことで、継続的な図書館経営を目指していきたい。

Ⅶ：第4分科会D「特別支援教育における読書活動」 ～特別支援教育の視点に立った読書指導～

宮崎市立木花小学校 教諭 石田 文子

1 はじめに

本ブロックでは、宮崎支部の研究主題「豊かな心と学びを育む学校図書館～特別支援教育における読書活動～」のもと、各学校の実践を持ち寄り共有した。情報及び他校の実践を共有しながら、特別支援教育の視点で読書活動を振り返り、学校図書館の充実や読書活動の推進を図った。

本地区は、宮崎県の中心にあり、温暖な気候で自然に恵まれた環境である。中核都市である本市は、宮崎平野を抱え、また、青島などの観光地もある。本市の図書館教育の現状は、小学校に学校司書、中学校に読書活動アシスタントが派遣されており、図書主任とともに図書館経営や読書指導を行っている。

2 主題設定の理由

学校図書館は「読書・学習・情報センター」としての役割をもっており、子どもたちが積極的に自由に利用し、読書の楽しさを感じ、学習活動を支える場所であることが望ましい。

特別支援教育は、「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点」に立ち、児童生徒一人一人に応じたニーズを把握し、指導・支援を行っていくものである。特別支援教育の視点から「読書活動」を見てみると、児童生徒のニーズに応じた読書活動の展開を行うことが必要である。また、特別支援教育は、特別支援学級のみならず、通常の学級、そして学校全体で推進されなければならない。そこで、ユニバーサルデザインの視点や子どもの実態に応じたニーズの視点に立ち、誰もが使いやすい図書館を目指し、できるところから少しずつでも改善していくことが、特別支援教育における読書活動の充実につながると考える。

3 研究目標

各校における図書館運営・読書活動をユニバーサルデザインや児童生徒一人一人の教育的ニーズの視点に立ち、見つけ、共有することで、自校の読書活動の多様なニーズに応じた読書活動の活性化を図り、特別支援教育における読書活動の充実を目指す。

4 研究の仮説

それぞれの学校が行っている実践を共有することにより、各校がより多様なニーズに応じた読書活動や学校図書館経営ができるようになり、特別支援教育における読書活動の充実につながるであろう。

5 研究の実際

宮崎市図書館教育部会は75校（小学校48校・中学校27校）で構成されている。本市会では、各校の図書館運営や読書活動、また、特別支援学級における読書活動についてアンケートを実施した。

(1) 「誰もが利用しやすい図書館」を目指した取組

各学校の図書館は、学校司書や読書活動アシスタント、図書主任を中心に、「誰もが利用しやすい図書館」を目指し、来室しやすい環境整備を行ったり、書架の展示方法や掲示物等に工夫をしたりして、児童生徒の読書意欲を高めるようにしている。

＜図書館の環境整備＞ ～書架の取りやすさ・並びの分かりやすさを工夫する。

○ 図書の配架の高さを配慮

○ 「図書分類」の表示を大きくしてわかりやすくした（大文字・イラスト入りなど）

○ 仕切り版（たな表示）の工夫（イラストや読みやすい文字を表示）

- ピクトグラムの利用

<図書館の環境整備> ～場の工夫をして利用しやすくする

- 個室、個室スペースなど
- 畳スペース（じゅうたんスペース）、ベンチスペースを設置
- 児童生徒のクールダウンの場所として活用（子どもの居場所としての利用）

<本の展示の工夫> ～掲示を工夫して読書への興味をもたせる

- 読書コーナーの設置（テーマを決めて）
- 本の並べ方を工夫（表紙を見せ、視覚的に興味を高めるなど）

<手続きの簡素化・わかりやすさ> ～本を借りやすくする、手続きを簡素化する

- 「貸出・返却」の手順を掲示（ひらがな・ルビ・イラスト入り）
- 貸出、返却手続きの簡素化・簡略化
(学校司書、読書活動アシスタント、図書委員会等の活用)

<所蔵本の工夫、機器・補助具の利用> ～本にふれやすくする、読書への意欲・関心をもたせる

- 大型絵本を準備、活用
- イラスト・写真が多い本を選書
- 紙芝居の活用、活用
- 拡大機器の活用
- LLブックの購入、活用、活用推進
- マルチメディアDAISYの活用及び活用推進
- 視聴覚資料（録音テープ・録音CD・ビデオテープなど）の活用
- リーディングスリット、リーディングトラッカーなどの利用
(手作りも含む)

<興味を持たせるための取り組み> ～学校司書・読書活動アシスタント等との連携の取組

- 学校司書、読書活動アシスタント等による資料選択、アドバイス
- 読み聞かせの実施
- ブックトークの実施
- アニメーションの実施
- 児童生徒による選書
- 各種イベントの実施

学校図書館の環境づくりや読書活動を分類してみると以上のようになった。本の配置を低くして利用者が取りやすくしたり、掲示物を見やすく理解しやすくしたりするなどの工夫が見られた。また、学校司書や読書活動アシスタントと連携して、児童生徒のニーズに応じた読書活動を実施していることもわかった。様々な取組を行いながら、読書意欲の向上を目指している。

(2) 具体的実践

次に、具体的実践についての取組を述べる。本市会では、各校の特別支援学級における取組を出しあった。次のような取り組みが見られた。

① 図書館の本を活用した学習指導

ア 授業での取組

教科（自立活動）単元「知っている本を紹介しよう」において実践した。ここでは、「自信をもって自分の気持ちを友達に伝えることができる。」ことをねらいとして取り組んだ。児童が、自分の紹介する本の表紙を見せて他の児童に紹介するという内容である。導入の段階で、教師が発表の仕方をカードで示しながら実際に流れを伝えることで、安心感をもたせ、児童に手順を示し、分かりやすくし

た。

紹介後に、発表を聞いていた児童が感想を発表したが、友達の発表を聞いて思ったことをうまく伝えられない児童に対しては、表現しやすいようにカードから選ばせ、発表しやすいようにした。児童の活動が停滞しないようにカードを示すということを行ったことで、自分の読書した本に興味をもってもらったり、他の児童の読んでいる本に興味をもったりして、読書への関心を高めることもできた。(加納小)

イ アニマシオンを取り入れた学習指導

国語「読む喜びを分かち合う」の学習で、アニメーションに取り組んだ。アニメーションの実践において、場面絵を活用しながら本文を区切った言葉をつなぎ、文を作らせた。そのつなぎ方によって、意味合いが違ってくることが知り、話を作る楽しさを味わうことができた。(佐土原小)

② 児童の実態に応じた学級文庫の設置

朝の時間や国語の時間に、児童の実態に応じた本を選んで読み聞かせをし、実際に子どもたちにも読ませて、音読の練習をし、「読む」ことができるようになり、抵抗感をなくすように取り組んでいる。ひらがな・カタカナを読むことが苦手な児童も見られるので、児童の実態を踏まえ、ひらがなとカタカナで書かれている本を今年度購入してもらい、教室にいつでもその本が読める環境を作っている。その結果、徐々にひらがなやカタカナなどを読めるようになりつつある。また、本に出てくる物の個数などがわかり、数の概念についても獲得しつつある。さらには、本が読めるようになったことで、自信をもち、意欲的に読書に取り組む姿も見られてきた。実態に応じた本の選書の効果が見られた。(高岡小)

② 学校司書との連携

ア 一人一人のニーズに応じた本の選書

本学級では、週に1回は必ず図書館を訪れ、自分で読みたい本を選ぶようにした。本が選べない児童に対しては学校司書にその児童に応じた本と一緒に選んでもらった。児童の興味・関心や、一人一人の読書スキルに応じた本を選んでもらうことで、知らなかったことや今まで興味を持たなかったことに対して興味を示すようになってきた。学校司書が、その児童一人一人に応じた興味をもてる本の紹介をしてくれるので、昼休みに自主的に図書館を移用するなど、本を自ら借りたいという児童が増えてきた。(大塚小)

イ 図書館のルールやマナーの習得

学級の図書時間に、学校司書から本の返却・貸し出しの仕方やマナーを学んだ。図書館を利用して、実技指導も交えながら学習した。一人一人の理解度を考慮しながら指導が行われた。児童は本の返却・貸し出しの仕方やマナーを理解したことで、昼休みも自分から図書館に行くようになった。図書館が児童にとって行きやすい場所となった。(生目小)

ウ クールダウンの場としての活用

クールダウンの場としても活用した。児童が気持ちを整理することができ、次の活動に取り組むことができた。このことで、児童にとって図書館は、安心な場所・落ち着ける場所という認識をもつようになっている。(生目台西小)

エ 季節に応じた本の読み聞かせや紙芝居の実施

本校の児童は、本に慣れ親しんでいない児童が多い実態があったので、学級担任や学校司書が、興味関心をもてる紙芝居や大型絵本などの読み聞かせを継続的に行った。図書館にある本の中でその季節やイベントに応じた本を読み、児童の興味・関心を高めることができた。紙芝居は自分たちで好きなものを選び、昔の話についてふれ、たくさんの疑問や感想をもつことができた。また、生活してい

る中で、自分たちで劇をして楽しむ姿や、学校司書の読み聞かせを楽しみにする姿も増えた。(大塚小)

オ 児童が作成した作品を通しての交流

児童が学習の中で作成した作品を学校司書に読んで聞かせたり、館内に展示してもらったりしたことで、児童の満足感を高め、次の学習への意欲を持たせることができた。(生目台西小)

6 成果と課題

(1) 成果

- 図書館の運営や読書活動をユニバーサルデザインや児童生徒のニーズに応じる視点から見つめなおしたことで、意識付けにつながる事ができた。
- 各校の児童生徒の実態に応じた取組を出したことで、具体的な実践について知ることができた。
- 学校司書、読書活動アシスタントとの連携を通して、児童生徒の多様なニーズに応じた取組が各校で工夫して行われていることがわかった。

(2) 課題

- 図書館運営や読書活動の中で、特別支援教育の観点からができることがあると考えられるので、各校でできることを実施していきたい。
- ユニバーサルデザインや児童生徒のニーズに応じた指導などを行って高めた読書への関心・意欲をさらに継続させる方策を考え、主体的に読書活動を行う児童生徒を育てていきたい。

7 おわりに

今回の研究を通して、特別支援教育における読書活動を児童生徒一人一人のニーズという視点をもって見つめなおすことができた。児童生徒一人一人のニーズに応じた読書活動をさらに充実させるために、学級担任や学校司書と読書活動アシスタントとが連携を取りながら、学校がチームとなって取り組んでいきたいと思う。

Ⅷ：第4分科会 D特別支援教育における読書活動

「DX時代の学校図書館構築 ～高校図書館の現状とこれから～」

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校 教諭 黒木 豪

1 はじめに

学研教育総合研究所の2021年8月の調査（「高校生白書」web版）によれば、高校生全体では1か月に平均1.4冊読んでいる（SLAの2021年学校読書調査では高校生は1.6冊）。同調査によれば2018年調査時は全体平均2.3冊だったため、わずか3年で約1冊減少したことになる。また、2021年度調査の小学生の全体平均読書量が2.9冊であることから、高校生の読書量は小学生の約半分であることも明らかになっている。学年別で見ると、小学生同様に男女とも学年が上がるにつれて読書冊数は減少しており、特に高校3年生では、男女ともに50%以上が「読まない」と回答している（SLAの前掲調査でも高校生の不読者割合は49.8%となっている）。高校生を含む若者の読書量の減少は以前から指摘されている通りではあるが、宮崎県高等学校教育研究会図書館部会南部支部に所属する各学校からも「コロナ禍で生徒の読書量（貸出数）が明らかに減少した」「読書量の二極化が一層深刻化した」との報告が相次いだ。

このような状況に対して、高校生を安易に批判するのは適切とは言えない。スマートフォンを通して多くのコンテンツに触れられる現代の高校生にとって、読書あるいは図書のもつコンテンツとしての価値は相対的に下がっている事実は否定できない。また、電子書籍や漫画もスマートフォンで読める時代に、書籍としての本を手にとっていないからといって「読書をしていない」と断罪するのはいささか軽率ともいえるだろう。近年の大学入試改革において、国語や英語、あるいは数学においてさえテキスト量が増大しているというのは周知の事実であり、日々更新されるweb情報の量からしても、現代の高校生は一昔前の高校生よりもはるかにおおくの「活字」情報に触れている可能性さえある。

ただし、注意しなければならないのは、その情報の多くは「断片的」なものにとどまっているという点である。昨今のweb上における炎上案件をみても、断片的な情報による身勝手な推論が招いたコミュニケーション不全に起因すると思われるものは少なくない。ゆえに、というか、だからこそ、断片的ではないひとまとまりの論理的情報に触れるものとしての読書体験の価値はむしろ高まっているといえる。問題は、その価値を我々読書推進に関わる立場の人間が上手にアピールできていないという点である。実際、YoutubeやTikTokには、本の紹介をするクリエイターもおり、人気クリエイターの紹介によって爆発的人気が出て紹介本が再版されたり、当該図書の古本としての価値が高まったという事例もここ数年増えてきている。紹介の仕方、あるいは本との出会い方の可能性を拓けることは、生徒が読書するきっかけになり得る。その意味では、多くの学校でも定着してきたビブリオバトルを中心に、生徒同士が気軽に本を紹介し合う機会を意図的に設けるといっては、生徒の読書量減少に歯止めをかけるうえで重要なことだ。

一方で、「働き方改革」のさなかにあって、今以上に新しい何かを始めるのは現実的とは言えない。何かを生み出すよりは、何かを辞めるべきだ。生徒にさせればいいという意見もあるかもしれないが、生徒とて暇ではない。そこで、コロナ禍によって一気に進んだ学校のDX（デジタルトランスフォーメーション）の活用を模索することにした。デジタルによる図書業務の効率化が可能か、また、それによって生徒の読書意欲を喚起できるか、とにかくやってみようという試みである。日常業務優先で、亀の歩みのような進捗でしかないし、「研究」というほどのものでもないというのが正直なところであるが、これからDXに取り組む学校にとって少しでも参考になれば幸いである。

2 主題設定の理由

図書業務の効率化と、生徒の読書量増加のために、図書館業務のデジタル化がどの程度可能か、また、どのようなことが効果的か探るため。

3 研究目標

- ・図書館業務のデジタル化とそれによる効率化を図る。
- ・生徒の読書量を増加させるための糸口をつかむ。

4 研究の仮説

デジタル化によって、生徒が図書情報に触れる機会が増えれば、生徒の読書量の増加、あるいは読書をするきっかけになるのではないか。

5 研究の実際

(1) Google Classroom を活用した図書館情報の発信

GIGA スクール構想によって宮崎県の県立学校のすべてに Google のサービスが導入され、授業等でも Google のアプリケーションが日常的に活用できる状況になった。そこで、Google Classroom において本校図書館のクラスルームを設置し、附属中学校を含む全学級及び職員に QR コードを配付して Classroom への登録・参加を呼び掛けた。

Classroom には、新刊図書の案内のほか、開館・閉館日のお知らせ、図書館開催のイベント情報などをタイムリーに流すようにした。

(2) Google Forms を利用したリクエスト本の受付

Google Forms を用いて図書のリクエストフォームを作成し、そのリンクを Classroom に掲載した。リクエストの受付にあたっては、ログインアカウントを学校から付与されている Google アカウントに限定し、学級・氏名とともに書名や ISBN を登録してもらうようにした。

6 成果と課題

図書館の DX 化といっても、業務に負担がない範囲で取り組んだため、実施できた取り組みそのものが限定的である。よって、成果といえるようなものはほとんどない。また、過渡期にあり、これまでの業務を削減したわけではないため、むしろ、導入に関する初期業務や管理業務が増えた一面さえある。しかしながら、一度導入してしまえば、あとの情報処理は非常に簡単で効率的であるし、何より、生徒にタイムリーに情報を提供できるというのは、図書館から情報を発信する側としては心理的メリットが非常に大きい。もちろん、それによって生徒の利用が増えたという客観的な証左は現時点ではないため素直に喜べるものではないが、紙ベースで取り組んできたものをデジタルに一元化することで、今後より一層の業務の効率化を見込むことができる。

(1) 成果

- Google Classroom については、7月現在で253名の登録があり、職員を含めて、およそ4人1人が参加しているという状況である。決して多いとはいえず、満足できる数でもないが、タイムリーな情報的共が届く人数としては、現時点では十分だと考えている。これまで紙媒体を印刷して届けるしかなかった図書館情報を、写真やPDFデータを用いてタイムリーに届けられるようになったことは、紙資源の利用削減にもつながっている。
- Google Forms を利用したリクエストの受付は、導入してすぐの5月は6件(高校1年生3件、高校2年生1件、職員1件、中学1年生1件)、6月7月は0件であった。

(2) 課題

- Google Classroom については、図書館情報を積極的に届けるために今後さらに登録者を増やしていく必要がある。
- Google Forms によるリクエスト受付は、予想以上に少なかった。書名や著者名、出版社名などを入力することを手間に感じる生徒もいたかもしれない。今後

は Amazon のリンクを張り付けるだけでリクエストを可能にするなど、利用者目線での簡略化に努めつつ、どのような方法が適切か模索したい。同時に、紙によるリクエストを辞めることで業務を減らしていく必要がある。

- デジタル化の過渡期である現在、紙による情報提供のほか、職員には県立学校職員専用のグループウェア「ミライム」(C4th のようなもの)にも情報を流している。それに加えて Google Classroom にも情報を流しているという状況のため、デジタル化以前より業務量は増えているというのが現状である。今後は職員にも Classroom への参加を促し、そちらに情報提供を一元化することで作業量を減らす必要がある。将来的には、各教室に配付している「図書だより」もデジタル配信に限定する、あるいは「図書だより」そのものを廃止して図書委員による動画による本の紹介や写真による本の紹介に置き換えることで、印刷コストや印刷業務そのものの発展的解消につなげる必要がある。
- 現状では Google による二つのアプリケーションのみを導入しているという状況であり、現状のまま利用者数を増やすというのは難しいと感じている。「はじめに」でも述べたように、Youtube や TikTok、あるいは Instagram 等ほかのソーシャルメディアも複合的に活用していくことが必要になるだろう。しかしながら、それが結果的に業務量の増加につながっては本末転倒であるし、情報提供者側の自己満足だけで終わり、結果的に生徒の利用増や読書量増につながらなければ意味がない。費用対効果については十分に精査する必要がある。

7 おわりに

G I G A スクール構想によって、デジタル化が一気に進んだ高校現場であるが、実際には、「使える準備が進んだ」だけであって、ほとんどの教員はデジタル化について来れていない。そして、それは生徒も同じである。デジタル化の恩恵を積極的に受け、活用できる生徒もいれば、機器をもっているだけの生徒もいる。若いからデジタル化についていけるというわけではない。そういう意味では、図書館の D X 化を進めても、期待したほどの成果は出ない可能性もある。しかし、「はじめに」のおわりで述べたように、まずはやってみなければ分からない。たとえ小さな取り組みであっても、始めてみるのが大事だということで今回の取り組みに至った。小さな一歩を踏み出して今思うことは、やはり D X 化にはまだまだ可能性があるということと、そこにアナログ的な要素を混ぜることでより効果的な運用が可能になるだろうということである。たとえば、学級文庫のようなアナログな取り組みと、個人のスマホ一つで貸出処理が済むというような掛け合わせである。Google Forms を利用すればそれに近いことは出来るので、現在システムを構築中である。また「カーリル」の導入も検討している。いろいろ壁はあるが、デジタル化の歩みを止めないことを目標に、小さな取り組みを今後も継続していくことで、生徒の読書環境、読書体験の向上に寄与したい。(了)

Ⅸ：第5分科会 E「学校司書・司書教諭の役割」

「豊かな心と学びを育む学校図書館」

～図書主任の役割、ITによる授業、支援法研究、教育～

五ヶ瀬町立五ヶ瀬中学校 教諭 伊東 巧磨

高千穂町立上野中学校 教諭 池田 恭平

1 はじめに

Society 5.0時代を生きる子どもたちのために文部科学省からGIGAスクール構想が打ち出され、現在は全国ほとんどの学校で1人1台のタブレット端末が整備された。これまでの調べ学習は学校図書館を使用することが主流であったが、現在は手早く欲しい情報を入手できるタブレット端末での調べ学習が主流となっている。また、インターネット上には電子書籍というデジタル化した本を閲覧できるウェブサイトもあり、学校図書館を使わずともタブレット端末でさまざまなことができるようになってきた。

しかし、インターネット上では得られない情報が学校図書館にはたくさんあったり、子どもたちの情報収集能力や情報選択能力等を育んだりすることができるという側面があったりと、学校図書館を活用する意義は十分あると言える。また、学校図書館の本は教師や生徒によって厳選された優れた本ばかりである。良い本や言葉に触れることで、子どもたちの感性を磨き豊かな心も育むことができる。

これらのことから、学校図書館は子どもの感性を磨き豊かな心を育んだり自らの学びを磨き知識を広げたりできる、学校教育には欠かせない場所である。そこで、図書主任や学校司書が中心となり図書館教育の推進を図りたいと考え本主題を設定した。

本西臼杵地区の中学校は4校あり、いずれの学校も司書免許を有した職員が配置されていない。このような現状から、本地区の実践発表は図書館運営の実際を担っている「図書主任の役割」として図書主任がどのように学校図書館の推進に努めたのか報告したい。

2 研究の目的

- 図書主任が生徒や職員、地域と連携し、図書館教育の充実を図る。

3 研究の仮説

- 図書主任が生徒や職員、地域と連携し、図書館教育の充実を図れば、生徒の豊かな心や学びを育むことができるのではないだろうか。

4 研究の実際

(1) 生徒との連携

ア 生徒による図書管理

日常の本の貸出・返却については昼休みに図書係が中心となって行っている。また、貸出・返却以外の時間は配架を行ったり、おすすめ本のPOPを作成したりしている。図書主任も在室しレファレンスを行うようにしている。

イ 生徒主体の選書活動

図書主任が分類ごとの充足率や予算を生徒（選定委員会）に提示し、図書室に必要な本を生徒が主体的に選ぶ取組を行っている。選定委員が選んだ本は集会等において選定理由もあげながら全校生徒へ伝達し図書館への来室を促した。

また、新しく購入した本については新刊コーナーに置き一目で分かりやすくするとともに、放送や呼びかけを図書主任と図書係で協力して行い、新着本貸出増加を目指した。

ウ おすすめ本の紹介（ビブリオバトル）

2年生の国語科の授業を使っておすすめ本の紹介（ビブリオバトル）を行った。1人1冊図書館の本を選び、紹介カードにおすすめする理由等を書かせた。その後その紹介カードを用いて小グループごとのビブリオバトルを行った。ビブリオバトル後は紹介カードを図書室外掲示板に掲示し、他学年の生徒でも見られるようにした。

(2) 同校職員との連携

ア 同校職員への図書館教育研修

学校図書館を「学習・情報センター」として授業で活用するために、各教科担任が図書館を使って実践できそうな授業について考える研修を行った。また、日本十進分類法についてもプレゼンテーションソフトを使って説明を行い、基本的な図書活用スキルの向上を図った。

イ 他校職員との情報共有

同地区内の図書主任同士で図書館教育の実践について報告する機会を設け、自校での図書館教育の運営に生かした。

ウ 図書主任と教科担任の IT で取り組む図書館活用の授業

各教科の授業で学校図書館を活用する際に、必要に応じて図書主任も授業に参加しサポートを行った。図書館活用についての説明を行ったり、レファレンスを行ったりした。また、場合によっては貸出の手続きを行い、授業後でも生徒が図書資料を見られるようにした。

(3) 地域との連携

ア 図書活動推進員との協働による読書指導・図書館運営

日之影町では、町立図書館が令和3年5月に開館された。その図書館司書が「図書活動推進員」として週に1日訪れ、日之影中学校に図書室運営のサポートや読書指導支援を行っている。

具体的には、図書室設営や配架・掲示物作成のサポート、図書の購入や廃棄の相談、読書通帳の提供などである。

イ 地域ボランティア団体による読み聞かせ

西臼杵3町にはそれぞれ読み聞かせを行うボランティア団体がある。図書主任が各ボランティア団体や町の教育委員会と連絡を取り合いながら、定期的に学校で読み聞かせをしてもらう時間を設定している。

5 成果と課題

(1) 成果

- 予算の関係もあり生徒の要望通りに導入する本を選ぶのは難しい面もあるが、委員会で時間をかけながら協議することで、読書への意欲喚起につながった。
- 図書活動推進員と協力し、図書館運営と設営を計画的に行うことができ、読書に親しむ気風を高めることができた。
- 地域と連携したことで、本を通し生徒と地域の人との新しいつながりができた。

(2) 課題

- 小規模校ということで、学校司書、司書教諭の配置はない。図書の貸出業務は基本的に図書係と図書主任が行っており、学校行事直前などは手が足りない状況がある。
- 空調機器が整備されていなかったり本棚が足りなかったりしているため、今後予算に入れてもらうように要望していきたい。

6 おわりに

1人1台タブレットが充実し、授業内で図書館に足を運ぶ機会が少なくなっている。また、休み時間や家庭でもタブレットで調べる方が手軽で、本を手取る機会が減っているように感じる。

だからこそ、各校の図書主任が中心となり、生徒が主体的に読書をするような取組をしなければならないと感じる。また、教師が生徒の読書の機会を奪わないよう、他職員や地域とも連携しながら図書館教育の推進を図っていくことが重要であると考えている。

今後も同地区の図書主任と協力・情報共有しながら各校の図書館教育を充実させていきたい。

X：第5分科会E「学校司書・司書教諭の役割」

「図書主任としての児童と本を繋ぐ取組」

～児童の自主的・自発的な読書活動の充実を求めて～

延岡市立西小学校 教諭 甲斐 身江子

1 はじめに

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、産業と自然や歴史・文化が調和した人口約11万人の都市である。本校はその延岡市の西部に位置し、静かな住宅街と大瀬川、愛宕山に囲まれた豊かな自然や田園風景が広がる落ち着いた環境にある。近くには恒富中学校と県立延岡高校とがあり、保護者の学校教育に対する関心は高い。児童数314名の計15学級からなる中規模校であり、『自ら学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成』という学校目標のもと、子ども達が通いたい、保護者が通わせたい学校を目指し、日々の教育活動に取り組んでいる。保護者は、ICT化が進んでいる現代であるが、「自分で文字を読み理解して考える力をもってほしい」という読書を推進する願いをもっている。

2 主題設定の理由

宮崎県は、「日本一の読書県」を目指しており、各校において読書県づくりに向けた取組を推進している。延岡市では、部会での小中学校の連携、各校と市立図書館の連携を図りながら進めている。しかし、一人一台ICTの導入など現代の教育の変化が進んでいく中で、子ども達の読書への意欲や本に触れる機会が減少している。

そこで、図書主任として、「本だからできること」「本の良さ」を子ども達に伝え、児童と本を繋ぐ取組を行えば、本に興味をもち、読書好きの児童を育てることができると考え、研究主題を設定した。

3 研究目標

図書主任として読書の良さを伝え、児童と本を繋ぐ取組を行うことを通して、本に興味をもち読書好きの児童を育てる。

4 研究の仮説

児童の自主的・自発的な読書活動の充実を求めるために、児童と本を繋ぐための「時間や場所、機会」をつくる工夫を行えば、本に興味をもち、読書好きの児童を育てることができると考えられる。

5 研究の実際

(1) 西小学校の取組

毎年11月に行っている図書館まつりの一環で『なかよし読書』を実施している。これは、1年―6年、2年―5年、3年―4年でペアを組み、上の学年が読み聞かせをするという取組である。上の学年の児童は、事前に本を選び練習をしておく。ペアはほぼ1対1なので、下の学年の児童は自分のために読んでもらうことになり、うれしそうな表情がみられる。また、運動場や中庭に敷物を敷いて行うので、読むほうも聞くほうもどちらも一生懸命で、多くのほほえましい姿が見られ優しい雰囲気になれる。このなかよし読書の後、各学年にアンケートをとると、低学年からは「おもしろかった」「お兄ちゃんが読んでくれてうれしかった。」「読んでもらった本を、自分でも読んでみたい」、高学年からは「読めるか心配だったけど、練習していてよかった。」「1年生が喜んでくれてうれしかった。」「また読み聞かせをやってみたい。」等の感想が聞かれた。この取組を通して、高学年には『読んで聞かせる』という活動から自主的・自発的な読書活動へ、そして低学年は『読んでもらった』→『自分で読みたい』という読書意欲へと繋がるのではないかと考える。

(2) A小学校の取組

学校と家庭でメディアとの関わり方や生活習慣を見直し、読書をしたり家庭とのコ

コミュニケーションの時間を増やしたりする態度や習慣を身に付けることを目的とした、NOメディア週間を行った。保護者へは、保健だよりを通してメディアの健康面や学習面に及ぼす影響について知らせ、図書だよりでもNOメディア週間について記し、その期間に家庭での読書をすすめた。家庭へは、学級通信で取組の結果や今後も継続して取り組むことの大切さを知らせた。

取組の結果としては、高学年になるにつれてメディアの視聴時間が長くなっており、これは、読書冊数と反比例する結果となった。NOメディアと家読週間を同時に行うことで、「テレビや動画を見る時間を決め、読書をする時間を作る」ことを意識させるきっかけになった。

(3) T小学校の取組

各学級に「読書の木」というカードを配付した。読書の木の実を増やしていく。この学校では始業前の7時50分から10分間は「朝読(あさどく)」の時間とし、この時間に10人読書していれば、読書の木の実に1個色を塗ることができるようにした。はじめは時間に間に合わなかったり、読書をしていなかったりしていた児童がいた。そのうちに児童同士が「朝読をしよう。」と声を掛け合い始めた。登校時刻が間に合わなかった児童が登校を早めて朝読をするようになった。また、読書に関心がなく本を手にとらなかった児童が朝読の時間に学級文庫の本を持ち出す姿が見られるようになった。目標とする10個の木の实全部を1週間で色塗りして目標を達成した学級もあった。

6 成果と課題

友だち、学級、家族などの人とのつながりをきっかけにすることは、大変効果を上げたとと言える。逆に、その機会や時間だけの成果となることも懸念される。

(1) 成果

- 家読チャレンジとしたことで、読書の時間が増えた家庭が多かった。それ以外にも家族とのコミュニケーションや趣味の時間等が増えたところもあった。
- 読書の楽しさに改めて気付く児童が増えた。お互いに読む本を薦め合う姿も見られた。
- NOメディア週間に合わせて図書祭りをを行うことで、児童の読書意欲が更に高まった。

(2) 課題

- 自分から進んで本に向かい、読書を楽しめるようにする、次の段階の手立てが必要である。
- 期間中はメディアの視聴時間を減らし、読書に取り組む時間が増えたが、習慣化までには至っていない。

7 おわりに

今回の研究を通して、児童の周りの環境の変化が読書時間を少なくしていると思う面があった。しかしそんな中でも、自分で文字を読み、自分で想像して考えるという大切な経験を今後もたくさん味わってもらいたいと願う。そのために、児童に読書の機会を増やすこと、本の面白さを伝えていくことを更に研究していきたい。

XI：第6分科会 F「地域・家庭・公共図書館との連携」

地域・家庭・公共図書館が協働して担う読書活動のあり方

～各地区の特色を生かした読書活動の実践を通して～

美郷町立西郷義務教育学校

教諭 川崎 愛

美郷町立南郷小学校

教諭 那須 裕美子

1 はじめに

本支部は、所属学校の地域が広範囲に渡っており、支部会を開催する際には遠方から集まる必要がある。このような実情から、研究会は読書感想画・感想文コンクールの審査と併せて年に1回の開催にとどまっている。また、所属学校のほとんどが小規模校であるため、在籍する職員が少ない上、担当教諭の授業時数の減免や学校司書・図書支援員等の配置がない学校が多く、図書館運営が十分機能しているとは言い難い現状がある。

また、公共図書館についても地域差があり、蔵書が充実していて学校との連携が行われている学校もあれば、公共図書館がない地区もあり、地域での読書活動にも課題がある。

2 主題設定の理由

児童の読書活動を充実させていくためには地域や家庭での読書活動も重要となるが、前述のとおり、本地区は研究会を開催するのが年に一度だけであり、また地区によって読書環境も異なる。これらの現状から、各地区で読書活動を推進するためにどのような活動を行っているのかについてまとめ、またその情報を共有することで、地区の特色を生かしたさらなる読書推進へつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究目標

○ 各地区の取組について共有し、各校の図書館運営に役立てる。

4 研究の仮説

各地区の特色を生かした読書活動の実践をまとめ、それを支部会全体で共有することは、大変意義深いと考える。また各地区における地域・家庭・公共図書館との連携についてまとめ、それらをお互いに共有することで、さらなる読書推進へつながるであろう。

5 研究の実際

(1) 支部会における協議

各地区（門川、美郷、諸塚、椎葉）に分かれ、「地域・家庭・公共図書館との連携」について、小学校・中学校合同でどのような取組を行っているかについて話し合いを行った。

(2) 各地区の取組

ア 門川地区

- ・ 読み聞かせを学期1回程度行っている。クリスマスなど、時期に合わせてイベントとして行っている。
- ・ 家読（親子読書）を月に1度行い、その日は宿題を出さずにじっくり読書できるようにしている。
- ・ 図書支援員が週に1回曜日ごとに各学校を巡回している。
- ・ 公共図書館から、授業で使う本の貸し出しや外国籍の児童へ英語版の本を貸し出ししてもらっている。
- ・ 「門川の子どもたちに読ませたい本」という取組を行い、職員が児童の発達段階に応じた本を選書している。

イ 美郷地区

- ・ 「みさと文庫」という取組を行っている。美郷南学園、西郷義務教育学校、美

郷北義務教育学校それぞれで選書した本を、学期ごとに各学校へ巡回させ、より多くの本に触れられるようにしている。

ウ 諸塚地区

- ・ 「ファミリー読書週間」を設け、家読を推進している。
- ・ 「絵本よみ隊」という保護者や地域の方11名で構成されたボランティア団体から読み聞かせをしてもらっている。読んだ本については掲示物を作成し、図書室で掲示している。

エ 椎葉地区

- ・ 公立図書館との連携として、図書館司書からオンデマンドで図書の紹介をしてもらっている。
- ・ 各学校の図書担当と、図書館担当で読書に関する意見交換会を行い、各学校間の図書団体貸し出しを行うようになった。
- ・ オンラインで中学生から小学生へ図書紹介をした。
- ・ 各学校で家読を行っている。同じ本を各家庭で回覧し読み聞かせを行う「親子読書リレー」など、親子のふれあいや各家庭同士のふれあいも意識した活動を行っている。

6 成果と課題

(1) 成果

各地区で、自分たちの読書活動を推進するための活動について振り返り、まとめることができた。また、各地区でどのように読書活動を推進しているのかを知ることができた。

(2) 課題

公共図書館の規模など、学校だけでは改善できないこともあり、その上でどのように地域・家庭・公共図書館と連携していけるのかについて、さらに考えていく必要がある。

7 おわりに

今回の研究を通して、年に一度の支部会の中で研究を進めていくことの難しさを感じた。同じテーマで各地区の小学校・中学校が話し合う機会を設けるなど、まずは各地区での取り組みがさらに充実できるようなシステムを構築していくことが第一歩ではないかと考える。

Ⅷ：第6分科会 F「地域・家庭・公共図書館との連携」

読みたい本を選び進んで読書する児童生徒を目指して

～地域・家庭・市立図書館との連携を通して～

日向市立平岩小中学校 教諭 松原 千春

1 はじめに

本校は、小中一貫校であり、小学部と中学部が互いに連携しながら、9年間の一貫した指導のもとで特色のある活動を行っている。中でも「読書活動の推進」は本校の重点課題の一つであり、グランドデザインの中で明確に位置づけるとともに、学校運営協議会においても、「読書とボランティアのまち 平岩」をテーマに協議を重ね様々な取組を行ってきた。学校全体としての取組にとどまらず、地域や家庭と一体になって読書活動を推進する体制が整っている学校である。児童生徒の実態として、毎日図書室を利用する人、月に1、2回程度利用する人など、読書活動に差があることが分かり、より多くの児童生徒が本に親しみ読むことの楽しさを味わえるように、地域、家庭に加え、市立図書館とも連携をしながら、読書に慣れ親しむ児童生徒をさらに増やすことを目標として、取組を進めていくことにした。

2 主題設定の理由

本校では、コロナ禍ということもあり図書室の利用制限を行っている。曜日ごとに図書室の利用学年を限定していることから、図書室の利用者数が少しずつ減ってきているという課題がある。しかし、コロナ禍であってもより多くの本に触れることで、読書の楽しさを味わってほしい、読書から得ることのできる多くの知識を吸収して豊かな感性を育ててほしいと願っている。そこで、図書室の利用制限をしている現状を踏まえ児童生徒の読書活動を推進するために何ができるかを追究し、学校だけではなく家庭や地域、市立図書館と連携しながら児童生徒が本に触れる機会を増やすことで、自分で読みたい本を進んで選べるようにならないかと考え、本主題を設定した。

3 研究目標

- 地域・家庭・市立図書館と連携し、様々な部類（種類）の本に多く触れることができる機会を工夫することで、児童生徒の読書活動の推進につなげる。

4 研究の仮説

本校の図書室の本は、学習に関するものや新刊などの割合が少ないので、学校の蔵書だけではなく、地域や家庭と、さらに市立図書館との連携を図り、多様な部類（種類）の本に触れる機会を増やすことで読書活動の推進が図られ、読書に対する意識が高まっていくであろう。

5 研究の実際

(1) 地域との連携

ア 「ビブリオバトル」

本校では、ブックラバーズによるビブリオバトルを年に2回開催している。地域の方の参加もあり、チャンプ本に選ばれた児童生徒には、地域主催の「本を語る会」会長から賞状を渡してもらうなど、地域を巻き込んだ活動となっている。

イ 「図書室の夜間開放」

毎週水曜日（18時半～20時）に地域のボランティアの運営で、学校の図書室を開放している。家族での利用が多く、およそ4～5人のグループで参加しており好きな本を家族で楽しむ姿がよく見られる。

ウ 「本を語る会」

平岩地域に住んでいる本の好きな地域の方々が呼びかけて集まり実現した会で

ある。月に一度の例会では、自分で読んでみておもしろかった、役立った、お薦めしたい本を持ち寄り、その本の紹介し合う活動を行っている。

(2) 家庭との連携

ア 「読書の日（ノーメディアデー）」

毎週火曜日を「読書の日（ノーメディアデー）」として設定している。火曜日はノー宿題デーとして、読書又は自分の興味のあることを選んで取り組める日として設定している。読書をした児童生徒は読書の記録を書くように習慣づけており、その記録からも「読書の日」をととても心待ちにしていることが感想として挙がっている。また、この日は、約9割の生徒が読書をしており、そのほとんどが「来年も読書の日を続けてほしい。」と願っていることがアンケートから分かった。さらに、家庭からも「親子で一緒に本を読めるよい時間になっている。」「読書の時間を家で取ることができないので嬉しい。」などの肯定的な意見が多く聞かれた。

(3) 公共図書館との連携

ア 「学級文庫の貸出」

学期ごとに30冊を貸し出しており、学年に応じた本や教科に関する本なども入っており充実している。

イ 「学習や指導に役立てるための本の貸出」

保健指導に役立つ本として、メディアコントロールに関する参考文献を用意した。授業などに必要な本を調査・準備し、各学年がそれぞれの内容に合わせて活用した。

ウ 「ブックバトン」

読書週間に伴い、毎年、本の紹介文やPOPを募集している。本校でも、図書室に募集箱を設けたり、応募用紙を各学年に配布したりするなどして、集まった作品を市立図書館に送り展示してもらっている。

6 成果と課題

(1) 成果

- 日常的に本を読む習慣がない児童生徒も、「読書の日（ノーメディアデー）」を通して本を読む機会を設けることで、週に一度は必ず本を読むという読書の習慣を身に付けることができた。
- 「ビブリオバトル」などの図書のイベント活動を通して、読書することの楽しさを感じている児童生徒が増えてきた。
- 市立図書館からの「学級文庫の貸出」や「ビブリオバトル」などを通して、様々な部類（種類）の本に多く慣れ親しむ児童生徒の姿が増えてきた。

(2) 課題

- 読書をする時間を確保しているが、読む本に偏りが見られ、今後も様々な部類（種類）に挑戦する手立てを考えていく必要がある。
- コロナ禍においても読書に親しみ読書の楽しさを味わわせることのできる活動について、地域・家庭・市立図書館と協力しながら、更なる取組を工夫していく必要がある。

7 おわりに

今回の研究を通して、児童生徒の読書活動を活発化するためには、学校だけではなく、地域や家庭、市立図書館と連携することが大切であること、読書に対する興味関心を高めることが必要であることが分かった。今後とも、児童生徒が進んで図書室に足を運び本に親しむことができる環境づくりに取り組み、地域・家庭・市立図書館との効果的な連携の在り方や、先生方が積極的に市立図書館を利用したくなる方法についても考えていきたい。



早水公園